
夢葉(ゆめやく)

F e e

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゆめやく
夢薬

【コード】

N3091Q

【作者名】

F e e

【あらすじ】

それを飲んで眠りにつけば、夢の中の願いが叶うかもしれない…
そんな夢薬の話。

？

けだるさと不機嫌をあわせて曇らせた、そんな表情とでも言ったらいいだろうか。そんな表情の女が一人、顔を半分マフラーで覆って歩いていた。横切る車を半分睨むように、半分煙たがるようにちらりと見るが、面倒そうにまた視線を戻す。

下を向いても正面を向いても、目を細め睨んでいるように見える。実際はまぶたをあまり開けていないからそう見えるのだが、目の下のクマや表情が、そんな印象を与えるのだろう。うつろにも見える目は時々眼光を不必要に強める。

吐き出せないせいで余計に悪酔いしているかのような生気の少ない顔にそんな表情と目つきだから、その内側になにやら明るくないものが詰まっていそうなのはなんとなく見て取れる。

けれどもこんな帰路に着く人間はごまんといえるのだ。いや、むしろ同じような状態で帰路に着く者が他にもいると思えたほうが楽かもしれない。

何にせよ彼女の他に同じ表情をして歩く者もなく、半端に悪質な孤独感につきまとわれながら女は歩くのだった。

イヤホンから流れる半自虐的な曲もくぐもったように聞こえて効果音が薄い。

ふとけだるいままの視線が薬局をとらえた。今時コンビニのようにきれいな薬局も珍しくないが、それはそういった類とは違っていた。

白い。

壁からドアから片方が閉まったシャッターから、すべてと言えるほど白いのだ。

アーケードすらないシャッター街になぜこんな真新しい店があるのだろう、地価が安いからだろうか。そんなことを考えながら、ふと風邪薬が切れているのを思い出した。

今更駅前まで引き返す気も起きず、女はその薬局に入ることにした。

中はまた外装のごとく白い。それも強引にペンキで塗ったような白でなく、材質からそうであろう白色なのだ。

イスがあれば小洒落た美容院に見えるかもしれないし、ポスターや商品が並んでいれば携帯販売店に見えたかもしれない。

しかし実際ここは薬局のほずであり、目の前には長いカウンターがあるだけなのだ。イスすらなければ、商品もカウンター向こうの棚にしか見あたらない。

まるでオープン前のようなようだ。

タイル張りの白い床、白いカウンター、BGWも流れていない店内。まるで違う世界に迷い込んだかのように思える。

しかし女にそれを楽しむ余裕はなかった。むしろ逆効果だった。ただでさえ疲れ、イラつき、余裕など無いのだ。本来なら好奇心で浮足立っても良いはずが、そんな風に思える余裕は無い。

さつさと終わらせて。それが女の中に湧いた乾いた思考だった。感情と言ってもいいかもしれない。

心身ともに余裕がないという意識は、更に余裕を奪ってゆく。

頭の中での思考の渦に気分が悪くなってゆく。まるで乗り物酔いのようだ。

そんな渦を、店の奥から歩いてくる人影がようやく断ち切った。

ボタンのない白衣を着た老人がカウンターの前に立つ。中々高さのあるカウンターで、1m以上はあるであろうか。そのカウンター越しに、老人は声をかけた。

「何を、お探しですか」

「・・・風邪薬ください」

女はいやに丁寧で無愛想な口調で返した。店にろくに商品を並べず、かといって出てくるのも遅いなんてと、苛立った気持ちを密かに込めて。

「“PPK”のかぜ総合か“ピグル・プロ”。“ダブルC”でもいいんで」

半分まくし立てるように女は風邪薬の品名を言った。半分は未だに引きずる苛立ち、半分は疲れから来る急かす気持ちから、言葉は自然に加速していた。

「“ピグル・プロ”ならありますよ。何粒のがいいですか？」

「75があれば」

「36粒と75粒がありますね」

「75で」

珍しい。大抵の薬局では多くて36粒入りのものしか見たことが無いのに。女はそう思い財布を出した。

「3700円になりますね」

妥当な値段だった。女は5千円札を出すと薬の詰められるのを待った。

「…ずいぶんお疲れのようですね」

淡々とした口調で老人が言った。気がつくところをじっと見ている。

「……これも入れておきましょう」

老人は目線をこちらから離さず、茶色い小ビンを出した。

「…何ですそれ」

女は明らかに不審そうな顔をしてそれを手に取った。手のひらに入るような、小さなビン。中には爪の幅ほどの大きさの錠剤が3粒入っていた。

成分を確かめようとラベルを見たが、どうにもおかしい。

女は風邪薬からビタミン剤、頭痛薬から漢方薬まで大抵の市販されている、普段飲むような薬の成分は見慣れていた。別段そういった類の教育を受けているわけではなく、普段から時間も金も無いので医者に行かず、自分で買う内に覚えるのだ。

値段は入っている成分で決まる。明らかに値段の高いか低いかする薬は成分を見比べ、ネットでそれを調べてから買うようなことをよくやっている。

しかし、疲れているからと言うのでビタミン剤の類と思って見ても、どうにも見慣れない成分ばかりだ。風邪薬でも見覚えがあるものはない。

「なんですか、これ」

「それは寝る前に飲んでください」

「…見たことのない成分ばかり」

「毒ではありませんよ。栄養剤のようなものです」

「栄養剤って、起きてる時飲むもんでしょ。最近は夜飲むのもあるけど、それに書いてあったような成分じゃないし。それに製造会社載って無いじゃない」

「それはここで調べたものです」

「大丈夫なの？これ」

「寝る前に飲んでください」

「疲れた思考と要領を得ない返答にしびれを切らし、女は小ビンごと薬をもらい店を出た。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3091q/>

夢葉(ゆめやく)

2011年10月8日05時33分発行